



水上ビルが腐り、鎖になる

Floating buildings rot and become chains

ここでは役割を終えた建築材料や空間のことを「腐る」とし、人・自然・時間・建築…などが鎖のようにつながっていくことを「鎖る」と定義する。水上ビルが腐ったとしても、腐ったことによって生まれる「鎖り」がある。

水上ビルを「鎖る」ー背景と目的ー

これまで既存不適格建築物で行われてきた「全解体」という非常に短期的な解体手法は、そのまちから姿を消し、その空間での記憶や周辺地域との関係、人々のつながりを一瞬にして分断していた。

愛知県豊橋市に位置する「水上ビル」はまもなく耐用年数を迎えようとしている。水上ビルは戦後の用地不足を理由に苦肉の策として水路上に建設された商店街であり、現在の法律では既存不適格建築物ではあるものの、戦後の苦しい情勢の中で生き抜く市民たちを救ってきた。しかし、その水上ビルも老朽化によりこの先、解体される。

水上ビルが腐り、「鎖り」のためのきっかけをつくることを目的として、「全解体」という手法ではなく、役目を終えた空間から更新を行う「部分的更新」によって空間を記憶継承し、新たなつながりの場として親水立体公園を計画する。公園内には更新を身近に感じるための廃材ステーションや廃材を用いたものづくりが行える木エスペース、スギ材の渋抜き橋などが設けられ、水上ビルが少しずつ変化していく様子が感じられる空間を計画するとともに、水上ビルの更新によって出た廃材がマテリアルとして循環され、水上ビルの記憶がまちに生き続ける様子も描いてゆく。市民営化を目的としているため、今回は1つの提案例として取り組む。

計画敷地



愛知県豊橋市の豊橋駅東側に位置する水上ビル一部及び周辺地域を計画敷地とする。駅からのアクセス面が良いことから水上ビル周辺は密集市街地となっているものの、人口減少によって空き家・空き店舗率が高くなっている。水上ビルの1階部分は店舗、2階以上は住居となっているが、老朽化により住居部分は新規募集を行っていない。

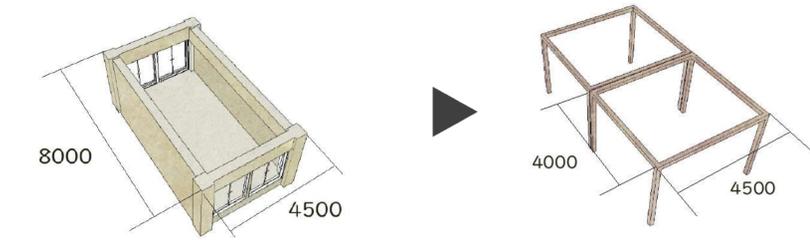
【水上ビル基本情報】

・水路幅員：8m
・水上ビル全長：約800m

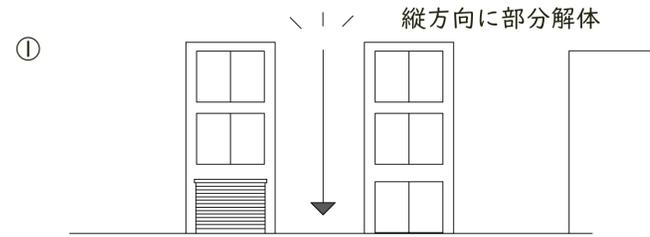
・構造：RC造
・建設年数：1964年

時間を「鎖る」

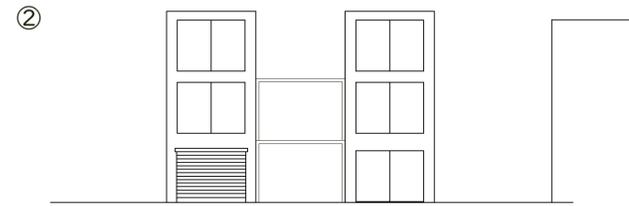
□水上ビル及びまちの更新



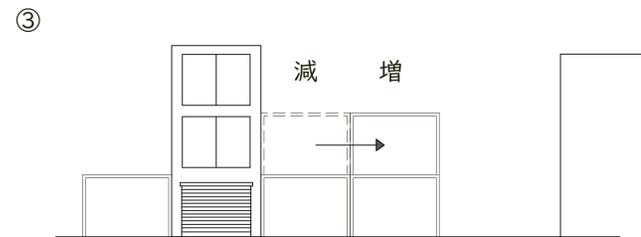
後世に記憶を残していくツールとして、水上ビルのスケールを参考に「木材立体格子」を提案する。市民の人たちでも参加しやすい4000×4500mmスケールとすることにより、水上ビルの更新の市民営化を図る。



① 現在空き家・空き店舗になっている箇所から解体を行い、更新のための余白をつくる。水上ビルは縦割り所有のため、縦方向に解体を行う。



② 解体された空間に立体格子を挿入する。RC造の水上ビルに付加価値を与えながら記憶が継承される。



③ 立体格子は増減を繰り返し、その時々の人々の生活に合った形へと変化し続ける。立体格子は記憶を継承するツールとしてこの先も更新し続ける。



④ 更新の際に出たコンクリートガラや木材などの廃材は路盤材や肥料、外装材などに再利用され、豊橋のまちに水上ビルの記憶が広がる。

□水上ビルと周辺地域の時間的変化パース



5年後



10年後



15年後



20年後

素材を「鎖る」－廃材の活用－

□木材立体格子を「鎖る」－木材の活用－

木材立体格子の更新の際に出た廃材は新しい形で豊橋のまちへと再利用される。水路付近であることも考慮し、地面からの高さ(木材の含水率による腐敗度)に応じて活用方法を变化させる。



□RC造の水上ビルを「鎖る」－RC材の活用－

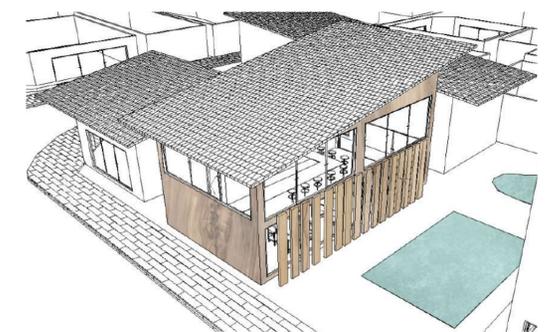
RC造の水上ビルを解体した際に出たコンクリートガラをクラッシャーランとして豊橋のまちに再利用する。コンクリートガラを再利用することで以下の利点が挙げられる。

- ①産業廃棄物削減
- ②アルカリ性による路盤材の雑草対策
- ③レンガや石畳の沈み込みを防ぐ
- ④水上ビルの記憶継承

□水上ビルからまちへ



「歩道空間の木材レンガ」
石造レンガと廃材木材レンガの新旧のリズミカルな歩道。立体格子の記憶を感じつつ、ヒートアイランド現象対策となっている。



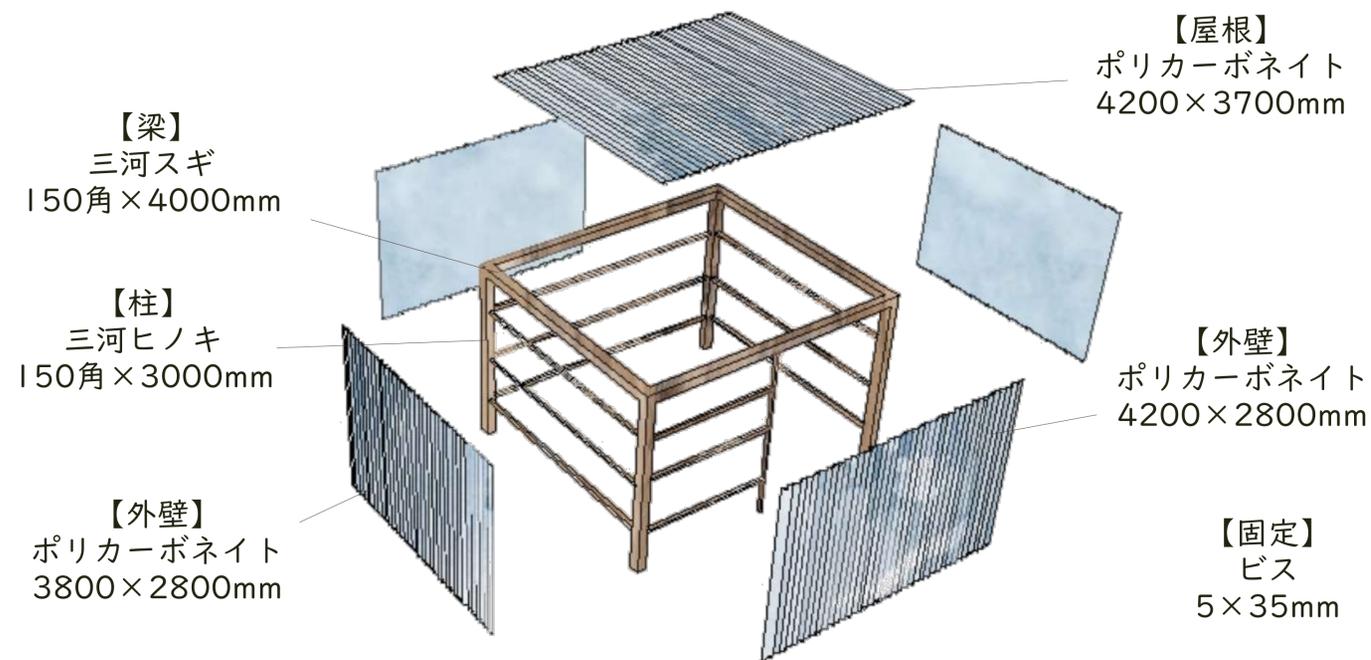
「個人住宅の外観リフォーム」
廃材を住宅の外観として再利用。樹木の経年劣化による色味の変化が楽しめる。

まち・人々を「鎖る」

□まちを、全国を「鎖る」

立体格子には豊富な水源のある三河地方の愛知認証材「三河材(スギ・ヒノキ)」を用いる。三河材の多くが伐採に適している時期である。三河材を用いることで三河の森林整備や輸送の際のCO2排出量削減、三河材の全国ブランドイメージの向上などに鎖る。

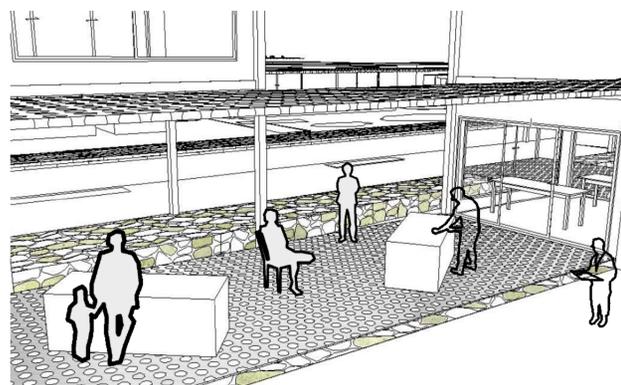
□木材立体格子の工法



重機を用いない更新に関しては可能な限り市民営化することを目的としているため、初心者でも組み立てやすい工法とする。製材期間は木工スペースで準備している木材が渋抜き橋まで香り、立体格子の更新時期を嗅覚で感じる。



「木工スペースから香る三河産材」
渋抜き橋を通ると立体格子の更新時期を嗅覚で感じる。



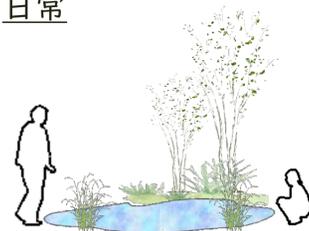
「みずのうえワークショップ」
木工スペースから伸びるワークショップテラス。水路の上で廃材に触れる機会をつくとともに新たな人々のつながりも生まれる。

周辺環境に「鎖る」

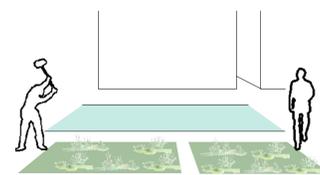
□水上ビルが腐り、水路が開くーまちの一時貯水池「みずひろば」ー

水上ビルを開渠にすることで市街地で発生しやすい大雨による洪水を防ぐとともに、水路が氾濫することを防ぐため、水路の地下ピットから伸びた「みずひろば(一時貯水池)」を水上ビル周辺地域に計画する。
「みずひろば」が広がるたび、RC造の水上ビルの終わりが近づいていることを示唆する。

日常

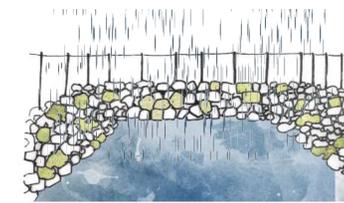


水辺のアクティビティの場として

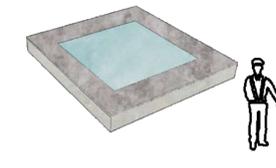


みずのみちは
畑や家庭菜園などへの活用

非常時



大雨時のダム
渇水時の貯水池



火災時の防火水槽
(水上ビル地区は防火地域)

□水上ビルが腐り、空き家・空き店舗をなくす

現在水上ビルにある店舗を水上ビル南北に移転させることで空き家・空き店舗問題を解消するとともに、分断されやすい水脈にコミュニティ空間を付加させた不特定多数の人が関わることができる(立体格子の)親水公園を設けることで立体格子から南北のにぎわいへと「鎖る」。



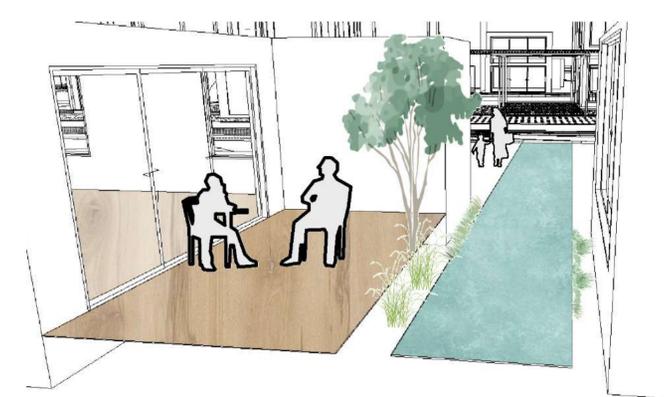
変化前地図



変化後地図

▲空き家・空き店舗に移動した後のまちの様子

■ 空き家・空き店舗



「みずのみち」
水上ビル周辺の密集街区を減築して一時貯水池につながる水の道を設ける。新たな環境軸ができるとともに、ここで育つ子供たちの原風景として記憶される。



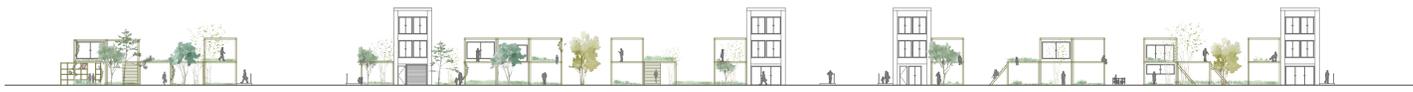
「まちのみずひろば」
水上ビルを開渠にしたことによりまちに現れた水の空間。常時は風の通り道や人々の憩いの場として、大雨や渇水などの非常時にはダム・貯水池として利用される。



5年後立面図 S=1:450



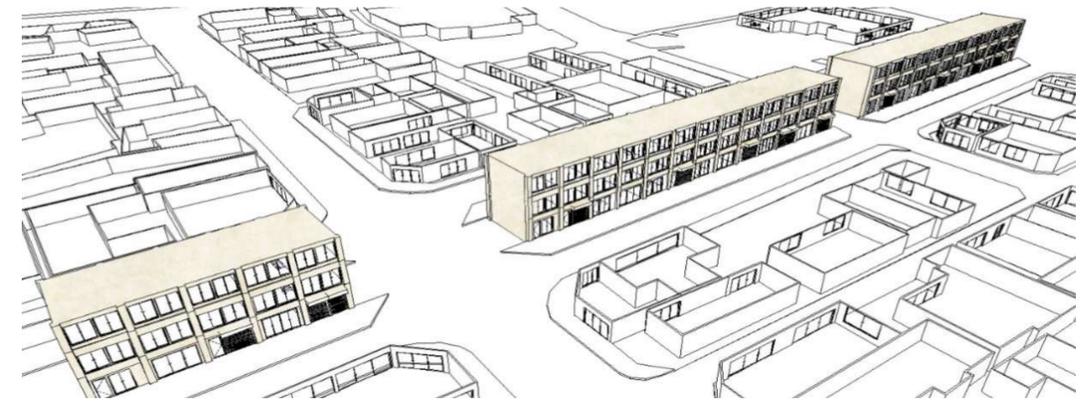
10年後立面図 S=1:450



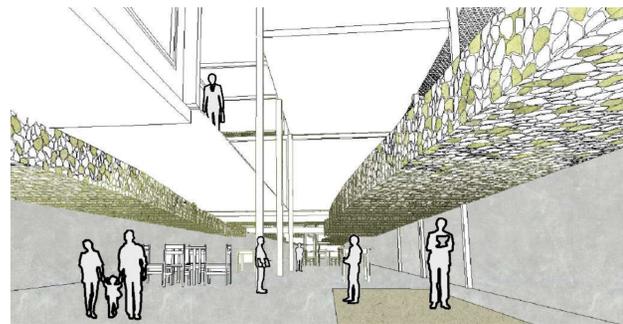
15年後立面図 S=1:450



20年後立面図 S=1:450

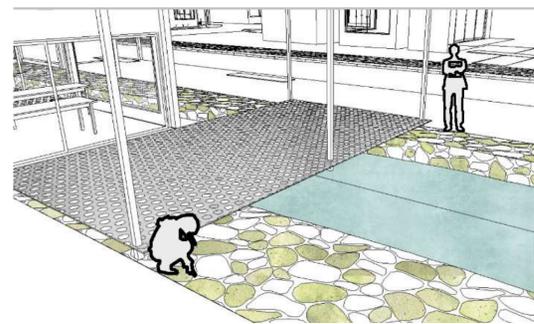


▲現在(上)と20年後(下)



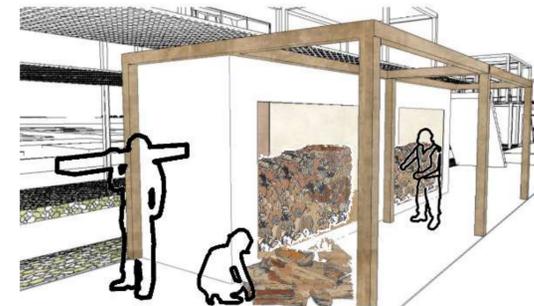
「みずのした空間」

冬場は水路の水がなくなる。水路空間でマーケットを開いたり、子供たちの遊び場として水路の下までにぎわいが広がる。



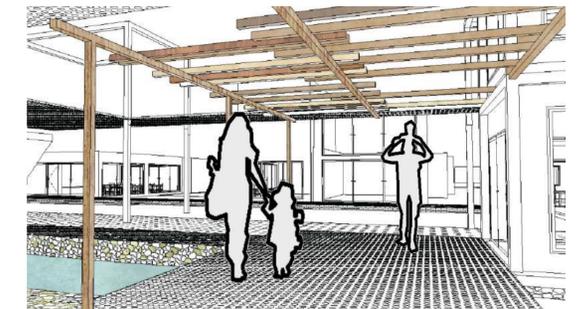
「時間とともに苔むした砂利」

水路の砂利は水気と建物の日影で時間とともに苔が濃くなっていく。



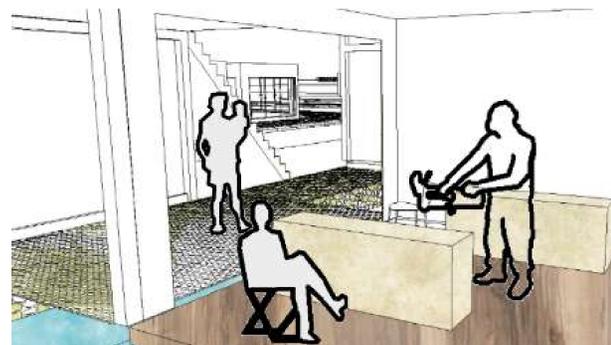
「更新のきっかけをつくる廃材ステーション」

廃材ステーションの木材を使い、家具やまちに開いたテラスを作るなど更新を知るきっかけづくりになる。



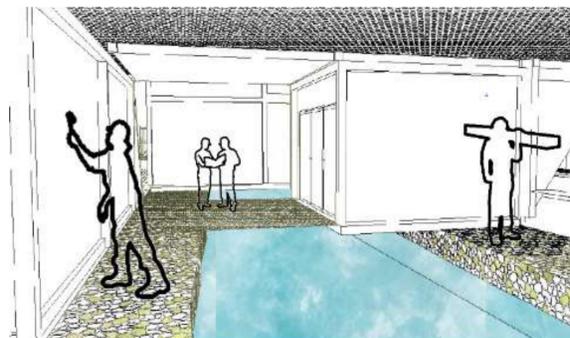
「渋抜きを行っているスギ材」

「渋抜き橋」を訪れるたびに赤みと光沢が増し、時間的変化が感じられる。



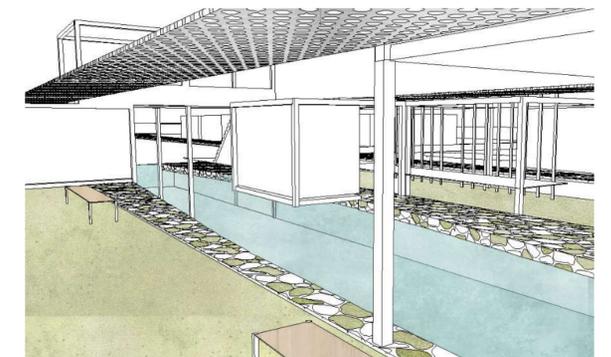
「木エスペース」

立体格子で用いられていた廃材ステーションの木材を使って木エスペースで作業。活動が外部まで広がり、様々な人の目に留まる。立体格子の更新時期には製材スペースとなる。



「人參湯コミュニティ」

かつて水路付近で営まれていた市民のための温泉「人參湯」を足湯として復活。冬場は豊橋の伝統芸能「鬼祭」を眺めることができる。



「みずのアーケード」

かつてのアーケードのスケールがよみがえる。東屋のような空間となり、水路との関係をゆるやかにつなぐ。